

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 108 2017年10月28日発行



2017年夏 子どもたちの保養 ウクライナ・ベラルーシ



みなさまの募金のおかげで
ウクライナとベラルーシの
子どもたちを保養に招待
することができました。
ありがとうございました。



～～ 本号の目次 ～～

- p.2～5 子どもたちの夏の保養
- p.6～9 ベラルーシの家族訪問
- p.10～11 里親の頁
- p.12 黒部ドクター
- p.13 2018年カレンダー
- p.14 販売品について
- p.15 募金・救援状況
- p.16 事務局から



**報告会「2017年夏 子どもたちの保養
チェルノブイリと福島」**
12/2 (土) 14:00～16:00

会場：パルシステム東京 新宿本部 2F第1・2会議室
(東京都新宿区)

～～～詳細は 最終頁をご覧ください～～～

★2018年チェルノブイリ救援カレンダー (撮影：広河隆一) お申込み受付中！

放射線汚染地域に住む病気の子どもたちのための特別保養

2017年夏 ウクライナ/ベラルーシ

みなさまからのご寄付のおかげで、今年もウクライナとベラルーシの子どもたちの保養プロジェクトを実施することができました。ウクライナでは、慈善団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」が、汚染地域のナロジチの病院の医師と連絡をとり参加者を選びました。ベラルーシでは慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」の会員（腫瘍病、血液病、遺伝病の子ども）の中から参加者が選ばれました。それぞれ、その地区の看護師、学校の先生が引率者として参加しました。以前は外国のNGOの招待で汚染地の子どもや病気の子どもは海外に保養に行ったが、今はほとんどなくなったといえます。

ウクライナの子どもの保養

■場所：ヘルソン州ゴーラヤ・プリスタニ地区
子ども保養施設「ドルフィン」

■期間：2017年7月2日～7月13日（12日間）

■参加者：子ども42人（8歳～16歳/ジトーミル州ナロジチ地区及びオヴルチ地区）、引率者4人。

■参加者の病名：慢性扁桃腺炎、慢性気管支炎、慢性鼻炎、心臓疾患、甲状腺疾患、胆道運動異常症、貧血症、筋骨格系の疾患

保養所のあるジェレズヌィ・ポルトへは14時間の長旅で、道中、何回か休憩を取りました。ニコラエフ州ミギヤ村での休憩では、子どもたちは、軽食を取るだけでなく、ラドン湖の美しさを堪能することができました。

保養施設に到着後、子どもたちは、施設の中で最も条件が良い建物の1つとされる別棟の宿泊棟に受け入れられました。その1階には個別のキッチンと食堂があり、各宿泊部屋には、シャワー室とトイレがあります。保養キャンプの敷地はきちんと区切られており、1日24時間警備されています。子どもたちには日に4回食事が提供されました。提供される食事は、バリエーションに富み、質も高く、味も満足できるものでした。

宿泊棟から50mの所に自前のビーチ（長さ150m、幅30m）があります。海水浴は、医療従事者や救護要員の立会いの場合に限り実施されました。ビーチへ行くのに、子どもたちには海水浴

用の用具類だけでなく、ボールなどの遊び道具も用意しており、水温が海水浴に適さないような日でも、困らずに楽しむことが出来ました。また、子どもたちは何度かイルカを見る機会にも恵まれました。イルカたちは岸辺近くまで泳いで近づき、素晴らしいショーを繰り広げられました。

保養施設では、経験豊かな教員、養育専門家、文化活動指導員らが子どもたちを受け持ち、滞在期間中毎日、スポーツ大会や楽しい各種コンクール、クイズ大会、コンサート、それに様々な教室、戸外ゲームといったプログラムが目白押しでした。また夕食後の時間帯、子どもたちは、興味深い舞台プログラムに熱心に参加し、ディスコ大会へも足を運びました。

滞在期間中、グループの3人の子どもが誕生日を迎え、この子どもたちのために思い出深い誕生会が開かれました。多くの子どもたちから祝福を受け、プレゼントや風船が贈られ、さら





にディスコ大会で集まった全員から祝われた経験は、忘れられない思い出となったことでしょう。こうして浜辺で過ごす日々はあっという間に過ぎ去っていきました。最後の晩、ヘルソンの浜辺に沈む太陽のかすかな光が残る中、お別れのキャンプファイヤーの炎が暮れゆく空を焦がしました。これで私たちの滞在プログラムは終了し、一行は保養キャンプを後にしました。

今回の保養に参加したすべての子どもたち、そして自らもチェルノブイリ原発事故被災者の認定を受けている引率者全員を代表して、日本のチェルノブイリ子ども基金の皆様にご心より感謝申し上げます。

<子どもたちの感想>

●お天気が良くて、海の水は温かかった。遠足に行き馬に乗ったことも楽しかった。思い出に残る素晴らしい日々だった。ぜひまたここに来たい。保養に招待してくれてありがとうございました。

(ヴィクトリア・14歳・女・ナロジチ) ●泳いだり、たくさん友だちができた、楽しくて仕方なかった。この保養を企画してくれてありがとうございます。(アレクサンドル・11歳・男・オヴルチ) ●「ドルフィン」での保養は毎日がとても楽しかった。海や、興味深い催し物がたくさんあった。食事もとてもおいしかった。(マクシム・10歳・男・オヴルチ) ●今年の夏は海で保養ができてとてもうれしかった。新しい友だちができた、手芸教室に参加したり、いろいろなコンクールやゲームも楽しかった。(ダリーナ・10歳・女・ナロジチ) ●初めて海に行くことができて、今年の夏は幸せだった。泳いだり、サッカーをしたり、

夜はディスコがあったり、キャンプファイヤーもあった。たくさんの友だちができた。あっという間に時間が過ぎたことだけが残念だった。保養をさせてくれた日本の皆さんに感謝します。(ディーマ・13歳・男・オヴルチ)

残念ながら、今回の保養の旅で保養施設のある町の入り口まで来たところで、バスの車中で一人の女の子が倒れてしまいました。女の子は車外に運び出され、引率の小児科医が応急の医療処置を施し、宿泊施設へ連絡を取りました。宿泊施設ではスタッフ、医師たちが待機していて、女の子に必要な処置を施しました。しかしその夜再び発作が起こり、この子は50km離れた病院へ救急車で搬送されました。翌朝私たちは女の子の両親をナロジチから呼び、両親は1昼夜をかけてこの子をジトーミル州立病院へ運びました。私たち全員がこの出来事に大変動揺しました。サーシェンカ(女の子の名)のことをとても心配し、絶えず彼女の両親に電話をかけていました。この出来事には、宿泊施設のスタッフたちも心を痛め、彼女のことを我がことのように気にかけていました。

(報告：引率者 ニーナ・B)

(※その後、ウクライナの慈善団体よりこの子どもの支援要請があり、日本の里親の支援を受けることに決まりました)。

ベラルーシの子どもの保養

- 場所：子どもリハビリ・健康回復センター「ナデジダ(希望)」 ミンスク州ビレイカ地区
- 期間：2017年8月3日～8月26日
- 参加者：子ども28人(8～17歳/ゴメリ市、レチツァ市、モーズィリ市、ブダ・コシエリョヴォ市、スヴェトロゴルスク市、ホイニキ地区)、引率者2人。
- 参加者の病名：脳腫瘍、目の腫瘍、悪性リンパ腫、精巣腫瘍、卵巣腫瘍、腎臓がん、血管腫瘍、血小板減少性紫斑症、染色体疾患(これらの病気の他、甲状腺、心臓、肝臓、胃、骨の異常、アレ

ルギー疾患があるなど、ひとりでいくつもの病気をもち子どもが多い)。

子どもたちはゴメリから列車でミンスクへ行き、そこからナデジダのバスで到着しました。到着後、医師の診察が行われ、それぞれに治療プログラムが決められました。保養の中頃と最後にも診察があり、治療の効果を確認します。午前中は治療(マッサージ、運動療法、アロマセラピー、スペレオセラピー(塩治療:天然の塩の部屋で過ごすことで呼吸器官の病気に効果がある)、薬草療法)、午後はクラブ活動(陶芸、絵画、手芸、木工細工、音楽)やコンクール、スポーツ大会、コンサートなどの催し物があり、夜はディスコや映画上映があります。子ども基金スタッフによる教室は、紙を巻いて作るプレスレット(写真下・左:材料は募金者の方からのご寄付)、折り紙、書道でした。

子どもたちと一緒にやってきた二人の引率者(看護師と教師)、ナデジダの教育担当者、心理カウンセラー、医師たちは、一人一人の様子に気を配り、心身ともに支える体制になっています。保養期間中、何人かの子どもが熱を出すなど風邪の症状が出て、医療棟で何日か過ごしました。医師は、「がんの治療を受けた子どもたちは免疫力が低いためウイルスに感染しやすい」と言います。引率者がある男の子の顔が赤いのに気づき、熱のあることがわかりました。少し前から頭が痛かったそうです。「どうしてすぐに言わなかったの」と聞くと、「みんなと遊べなくなると思ったから」

と答えたそうです。重い病気を患った子どもたちは、病院や医師を怖がったり、可愛そうだからと親が甘やかしてしまいわがままになったりすることも多いそうです。しかし親元を離れ友だちと過ごすことで、自立心が強くなると言います。

●心理カウンセラー:医療・心理・食事に加え、クラブ活動やイベントに参加することで、子どもたちは前向きな気持ちになる。それが健康回復に役立っている。

●医師:7月に福島の子供たちがナデジダに来てベラルーシの親子と交流をした。日本から助けてもらった私たちが、今度は私たちの経験を彼らに伝えた。世界にはいろいろな悲劇がある。将来のある子どもたちの健康を第一に考え、お互い助け合うことが大切。

●ナデジダ職員:ナデジダで最初の外国のプロジェクトは子ども基金のものだった。それが今でも続いている、そしてそのおかげで諸外国のプロジェクトが始まったことは大変素晴らしいことだと思う。

この時期、ナデジダには450人(敷地外の夏のキャンプ場等の滞在者も含めると全体で769人)の子どもたちが滞在していました。日本の子ども基金の保養プロジェクトの他に、イタリア、オーストリアのNGOによるプロジェクト(汚染地の貧困家庭のこども・孤児院の子どもの保養、障害のある子どもの保養)もありました。また、国の予算による学校単位の保養、同じく国の予算による親子の保養もありました(※この中には、以前、



ナデジダで親子の保養

子ども基金の奨学金支援を受けた女性とその子どもが参加していました。右写真)。他に、スポーツクラブ（バスケットボール、テコンドーなど）、ダンスや演劇クラブの合宿として滞在している子どもたちもいました。子どもたちはグループを超えて仲良くなっていました。

<子どもたちの感想>

最後に行われたアンケートの「来年もまたこの保養に参加したいか？」の質問に、全員が「はい」と答えました。「何が一番楽しかったか」の質問には、「陶芸教室」「手芸教室」「スポーツ大会」「友だちと遊んだこと」などの答えがありました。「マッサージ、スペレオセラピー、アロマセラピーの治療を受けた。食堂の食事は全部おいしかった。おやつもたくさんだった。ここに来たのは初めてだったが、環境にはすぐに慣れて、新しい友だちもたくさんできた。来る前より体調がよくなったと感じる」（イリヤ・13歳・ゴメリ市）

【太陽光発電施設が完成】

ナデジダでは、8月から出力600kwの太陽光発電がスタートしました。太陽の出ている日なら、ナデジダの電力を全て賄えるそうです。保養に参加した子どもたちは、ドイツの支援によるソーラーパネルを見学しました。

【屋内プールの建設予定】

プール建設は、ナデジダにとっても子どもたちにとっても長年の夢です。数年前から建物の土台はできていますが、国の予算が滞り、なかなか建設が進んでいませんでした。やっと2019年完成の目途が立ったそうです。



チェルノブイリ30キロ圏内立体地図（子ども基金が贈呈）を見ながら、なぜ自分たちは保養が必要なのか、という説明を聞いている。



ユーリヤ 30歳
長女カーリーナ 12歳
次女ナースチャ 7歳

ユーリヤはチェルノブイリ事故当時、後に高濃度汚染地となる祖母の家に行った。9歳の時甲状腺の手術を受けた。その後、子ども基金の招待で「甲状腺手術後の子どものための特別保養」に4回参加、また大学生の時、子ども基金の奨学金支援を受けた。現在はミンスク市内で医師として働き、夫と二人の娘と暮らしている。「自分が子どもの頃に保養に来たナデジダに来て、懐かしい気持ちでいっぱい。よい思い出ばかり。新しい建物ができたり、設備も以前よりとてもよくなっているけれど、ナデジダの“魂”は変わっていないと感じる。昔からの職員も私を覚えてくれていて、再会できてうれしかった。甲状腺の病気になったことは、もちろん、よいことではなかった。生涯薬を飲み続け、検査を受けなければならない。でも外国の支援で保養に行き、外国の文化に触れることもできたし、多くの友人もできた。そうでなければずっと生まれた村の狭い世界で過ごすだけだったかもしれない。医師になろうと思うきっかけにもなった。甲状腺の病気になっても、全てに絶望したりはしなかった。今私はこうして二人の娘を育て、医師として働いている」

（報告 佐々木真理）

ボグダン・N (2013年生まれ)

ゴメリ州エリスク地区

母親の話「生まれてすぐは何も問題はありませんでしたが、生後6か月で注射を受けた後、足が動かなくなりました。

しかし小児科医も外科医も何も処置をしませんでした。別の病院で検査をしても何もわかりませんでした。次にゴメリ市の病院で検査を受け、1年間マッサージ治療に通いました。その時には少し歩く姿勢を取り始めました。治療費は無料でしたがバスと列車を乗り継いで通院するのは大変

でした(住んでいる村からゴメリは約200キロ離れている)。1歳10か月のとき、咳が1か月くらい止まらなくなりました。エリスクの病院で肺炎と診断され、10日間点滴を受けました。咳の症状は和らぎましたが、完全には治りませんでした。ゴメリ市の病院で肺の辺りに腫瘍が見つかり、翌日、ミンスク市の小児がんセンターへ救急車で送られました。私も付添って行きました。病院へ着いてすぐ検査、3日後に手術を受けました。悪性腫瘍でしたが、転移はないということでした。化学療法4ブロックを受けました。3か月後、ミンスクの別の病院(神経外科専門病院)で2回目の手術を受けました。さらに3か月後、肺の近くに一番大きい腫瘍が見つかりました。



今年5月にも検査を受けました。足の筋緊張がありますが、治療方法がわからず、誰も教えてくれません。どうにか治したいと思っています。ボグダンは食欲がほとんどないため、

ビタミン剤(子ども基金が現地団体に支援しているもの)を飲ませています。

私の両親が近くに住んでいて、子どもの世話など助けてくれます。ボグダンには私がマッサージをしています。本当は専門家にかかる必要があります。体を支えるコルセットが必要と言われましたが、どこに行っても作ってもらえませんでした。それで自分で縫いました。私たち家族はちゃんと働き、きちんとした生活をしています。それなのに、ロマ民族だからと、どこでも偏見の目で見られ、病院などでも他の人たちのような扱いをしてもらえないことが多くあります。息子は、外で遊んでいる他の子どもたちを見て、「いつになったら僕は歩けるようになるの?」と泣きます」

父親の話「私たち夫婦はロマ民族ですが、定住し、きちんと教育も受け、教会に通う信者です。仕事もしています。過去のイメージにあるジプシーのような移動生活や、占いや、人を騙すようなことなどしていないのです。私はウクライナの生まれです。孤児で、祖母

に育てられました。厳しく教育されましたが、今ではそれに感謝しています。私にはまだベラルーシの国籍がありません(8年間定住しないとベラルーシ国籍が取れない)。病気の治療を受けるためウクライナに行っている間に、職場を解雇されてしまいました。職を失って3か月になります。次の仕事を探しているところです。家の中は、床や壁などいろいろな修理が必要ですが、ボグダンが病気になってからは、お金は全部治療のために使っています」

ボグダンは自力では歩くことができず、コルセットで固定しないと体を保つこともできない。その後、ゴメリの慈善団体の紹介により、ボグダンはゴメリ市の専門病院へかかることになった。家族の暮らしている村には病院も店もない。鶏を飼育し、畑で自分たちが食べるための農作物を作っている。



ヤロスラフ・T (2013年生まれ) ゴメリ市

「1歳半まで健康に何の問題もなかったが、扁桃付近の神経芽細胞腫と診断され、2016年秋にミンスクの小児がんセンターに入院して化学療法3ブロックを受けた。そこでの治療は無料だった。ミンスクの慈善団体の支援でモスクワの病院で検査を受けたことがある。

今も月に1度、首の下リンパ節の検査を受けている。リンパ節が大きくなっているが、今のところまだ手術は必要ではないと言われている。今後の治療はまだはっきり決まっていない。完治の方法がわかっていないので、おそらく治療はずっと続くのではないかと。ヤリク(ヤロスラフの愛称)は頻繁に体調を崩す。数時間おきにいろいろな薬を飲ませないといけない。来週また小児がんセンターへ検査に行く予定。地元の病院では何もわからないので、何かあったらミンスクの病院までいかなければならない。感染症が心配なので医師から保育園への通園を禁止されている。

長男ディーマは甲状腺と鼻に問題がある。10歳なのに胃炎もある。少し吃音もある。どちらかを病院に連れて行くときは、祖父母が子どもの面倒をみってくれる。祖父はブラーギン地区の村(汚染地)の出身。チェルノブイリ事故後、1990年には全員が移住し空っぽになったが、今は少し人が戻り住んでいる。汚染地のホイニキなどで取ったキノコなど気にしない人もいる。みんなチェルノブイリを忘れていてる。

私も息子もアレルギーがある。私は慢性気



管支炎もある。子どもの頃、「チェルノブイリの子ども」として、ドイツへ保養に行ったことがある。そして自分が母親となり、息子の病気がわかったとき、医師は息子を「チェルノブイリの子ども」と呼んだ。夫は甲状腺に問題があり定期検査を受けている。夫の母は甲状腺がんの手術を受けた。

今、100%健康な子どもはいないのかもしれない。ディーマもヤリクも生まれてすぐ肌がオレンジ色になった。肝臓に問題があった。いつも子どもたちの検査結果がわかるまでとても心配。検査に行かなければならないのはわかっているが、結果を知るのが怖い。忘れたいけど、いつもそのことが頭にある。ヤリクは、「健康になりたいから教会へお祈りに行こう」と言う。化学療法の後、免疫力が落ちて、感染症が心配だった。まつ毛も全部抜けた。いまやっと伸びてきている。6月までは生野菜や乳製品は禁止されていた。ゆでたものだけ。その頃は食欲もなく体重は13キロだった。今は何でも食べられるようになり19キロになった。ただ肝臓には気をつけないといけないから、油物など食べさせない。病院のカウンセラーに、犬は子どもの精神衛生によい



「大好きなヤリク、早く元気になってね」友だちから贈られた寄せ書きの前で

と忠告され、それで犬を飼うようになった。カメも飼っている。以前、ネコを飼っていた。ヤリクが病気になり、入院中にネコががんで死んでしまった。ヤリク

には死んだとは言わず、「どこか遠くに行ってしまったみたいよ」としか言わなかった。ヤリクの身代わりになってくれたのではないかと、そんなふうにも思う。そんなこともあるのかもしれないと」

ナースチャ・G (2003年生まれ)

ゴメリ州レチッツァ市

母親の話「ナースチャは生まれてすぐに心臓、股関節、目の異常などがみつかった。いろいろ検査をした結果、1歳の時に「歌舞伎症候群」(精神遅滞を伴う原因不明の先天異常症。日本人によって発見された病気。患者が切れ長の目になることから命名された)と診断された。脳神経に問題があり、4歳まで言葉を話さなかった。医師は、「この子は大きくなっても歩行はできず、言葉も話せない、知能もこのまま発達しない」と言った。でも私たちは諦めずナースチャによいと思われることを今までしてきた。リトアニアにある専門のサナトリウムには、3歳の時から毎年行っている。マッサージ治療などを受ける。1回目は病院から紹介されて無料だったが、その後は自費で行った。他にも、乗



馬療法、イルカ療法など、とても高額だけれど、お金を貯めて受けさせてきた。2010年にはウクライナの専門医の治療も受けた。これらのどれが最も効果があったのかはわからないが、きっといろいろな治療の効果が合わさって、ナースチャは歩けるようになり、少し話せるようになっているのだと思う。7歳の時の知能検査では、3歳の知能だった。14歳の今の知能は10歳くらい。

視力がとても悪いため5歳から眼鏡をかけている。視力障がいの子どもの専用の保育園に通い、学校も1年生までは通っていた。その頃は指が動かせず、文字も書けなかった。今は自宅で学習をしている。指の動きをよくするのに効果があるということで、ビーズ細工でいろいろなものを作っている（棚の上にはナースチャの作品が飾られていた）。以前はものを手でしっかり掴むこともできなかった。また、両方の足の長さが違うため特別な靴が必要（足首を固定した靴で、片方の踵が高くなっているもの）。

この町には専門の医師がいないため、検査や治療はゴメリやミンスクの病院に行かなければならない。ナースチャを病院に連れて行くときには、郊外に住んでいる祖父母が下の子の面倒をみってくれる。畑の野菜などももってきて助けてくれている。二人の子どもを学校に行かせるために必要なものを買ったら、あっという間にお金がなくなってしまう。それに店で最低限必要な食品を買ったら、あとはほとんどお金が残らない。

私が子どもの頃、ほとんど病気をしなかったし、周りにも病気の子どもはそんなにいなかった。今は周りで子どもも大人も病気の人

が多い。骨折もとても多い。医師は、それは放射能のせいで骨が弱くなっている、という。いろいろながんの話もよく耳にする。チェルノブイリの影響だと思う。放射能のある土地でとれた食べ物を食べているからだと思う。人が病気になる話を聞いたり、テレビで見たりすると、自分の身近な人が病気になるのとは全く違う。家族が病気になると放射能の影響を思い知る」

父親は仕事に出ていて不在だったが、弟の Maksim (6歳) は、訪問した私たちを部屋に案内したり、食器を運ぶなどの母の手伝いもよくしていた。

子ども基金の支援を受けた女性が母親に



ヴィタリーナ
(1987年生まれ)
娘マーシャ(1歳)

ベラルーシ
ゴメリ市

5歳のとき甲状腺手術を受けた。難聴、子宮・卵巣の異常

もみつかった。子ども基金の「甲状腺手術後の子どものための特別保養」に参加した。大学生の時には子ども基金の奨学生支援を受けた。2010年大学を卒業。現在は水質調査の会社に勤め、夫と共働きで娘を育てている。子どもの頃にナデジダの保養で知り合った友人の何人かとは今も連絡を取り合っているという。「ナデジダで保養をしなければ、同じ町に自分と同じ病気の子がいることを知らず、きっと孤独だったと思う」



里親のページ

チェルノブイリ子ども基金では1998年から甲状腺手術後の子どもたちの里親支援を開始しました。これまでに支援を受けた子どもは 292 人です。現在は、他の腫瘍病、血液病など 68 人の子どもたちが支援を受けています。里子やその家族からの手紙をご紹介します。

✉ Fさんへ

ご支援に心からお礼を申し上げます。ナースチャは9月からゴメリ医科大学の6年生です。将来は小児科の医師になることを熱望しています。子どもが好きで、子どもの病気を治してあげたいと思っています。体の具合は相変わらずで、薬を飲み、ミンスクの病院へ検査に行っています。8月31日、また病院へ行かなくてはなりません。あなたからのご支援はなくてはならないものです。私たちはそれを娘の治療費に充てています。治療には少なからぬお金がかかります。あなたが私たちを理解して下さい、支えて下さることに本当に感謝しています。あなたとご家族にもお礼を申し上げます。ご健勝をお祈りします。

2017年8月 ナースチャの家族より
ベラルーシ・ナロヴリヤ市

✉ Iさんへ

ほんとは直接お会いしてお礼の言葉をお伝えたいです。あなたのご支援がなかったらどうなっていたかわかりません。サーシャは専門学校を卒業し、陶器工場の絵付けをする仕事に就きます。8月3日からそこへ研修に行っています。3か月後には正式に働きます。絵付けの仕事はサーシャにとって楽しいことです。サーシャはとてもきれいに描いています。家では本を読んだり、絵を描いたり、ネコと遊んだりして過ごしています。ただ仕事で疲れたときは、家でじっとして休むこともあります。就職前に健康診断を受けました。幸いなことにがんの転移はなく、小康状態であることがわかりました。今後も半年に一度は検査が必要です。これからも彼女と一緒に病気と闘っていきます。神

様が私たちあなたを引き合わせてくださいました。あなたがサーシャにしてくださったすべてのことに心からお礼を申し上げます。

2017年8月 サーシャの家族より
ベラルーシ・ドーブルシ市

✉ Mさんへ

贈り物をありがとうございました。あなたのご配慮とご支援にいつも大変感謝しています。



息子ニキータは4月27日で15歳になり、9年生を終えました。そして自動車整備の専門学校に入学しました。4月、息子の障がい者認定が3年間延長になりました。成長して体も大きくなりましたが、健康状態がよいとは言えず、よく体調を崩し入院します。たくさんの

お金がニキータの薬や学業のために必要です。でも明るく人付き合いもよく、人生を楽しんでいます。夫は再発性の心筋梗塞を繰り返しています。私も女性特有の病気があります。家族で働いているのは私一人です。残念ながら私の給料は必要なものさえ買えないほど不足しています。あなたのお気遣いと、経済的支援に再度お礼を申し上げます。

2017年8月 ニキータの家族より
ベラルーシ・カリニコヴィチ地区

✉ Aさんへ

アレクセイの母よりお便りいたします。私は一人で息子を育ててきました。実父には他の家族がいて、私たちへの援助はこれまでなく、これからのないでしょう。生活費、息子の治療費、すべてが私の肩にかかっています。息子は最近新たな腫瘍が見つかり、専門の病院へ行きました。今年、教育大学の数学物理学科を卒業しました。今は高等教育機関の情報と数学の先生をしています。大学の(夏の)試験後、アレクセ

イは障がい者の世話をするボランティアに参加しました。賢く、優しく思いやりのある陽気な若者です。人が好きで、特に助けが必要な人に無関心ではられません。彼自身、いろいろな苦勞をしているからでしょう。どんな時でも私たちは頑張っ生きています。でもやはり、お金がないと生きていけないというのは辛いことです。息子、アレクセイの人生にあなたがいて下さったことに感謝しています。

2017年8月 アレクセイの母より
ベラルーシ・カリンコヴィチ市

☒ Mさんへ

私たち家族は、あなたのご配慮とご支援にとても感謝しています。あなたのお誕生日は最近でしたね。私たちは心からあなたのご健康と、ご長寿、人生に幸いがありますことをお祈りいたします。ポリーナは13歳になり、7年生に進級しました。とてもよく勉強します。英語や生物、歴史が好きで熱心にやっています。フランス語は独学するほど好きです。時間があるときはダンスやビーズ細工をしています。とても明るく社交的な女の子です。ポリーナの上に3人のきょうだいがいます。娘2人と息子1人。もう成人していて別々に住んでいます。また、下には3年生の弟がいます。私たちはとても仲のいい家族です。みんなの誕生日や祝日には全員でお祝いします。あなたのご家族、ご親族がご健勝であられますことをお祈りしています。

2017年8月 ポリーナの家族より
ベラルーシ・ゴメリ市

子ども基金の支援で腎臓移植手術を受けたウクライナのウラディスラフは、現在、日本の里親から支援を受けています。

☒ 支援金を受け取りました。里親のIさんにくれぐれもお礼をお伝えください。僕のことを心配してくれて、本当に嬉しく思います。あなた方以外は誰も助けてくれません。国は僕たちのことを気にかけてくれていません。この何年

間のうち、国から医薬品の支援があったのは数か月間だけです。国の機関に何度も働きかけました。国家には僕の薬のためのお金がないということです。僕にとっては生きていくために必要な薬なのです。今後どうしていったらよいかわかりません。病院からはまだ連絡がないため、検査を受けることができません。ただ、体調は以前より良いと感じています。ご支援を本当にありがとうございます。



2017年9月11日
ウクライナ・オヴルチ市

2017年6月号ニュースレターで緊急支援の報告をしたウクライナのユーリヤからも近況が届きました。

☒ 風邪をひいたため服薬治療が中断されていました。今は心臓、顔の皮膚に反応が現れ、胃も痛いです。それらが治まってから治療を再開します。よいお知らせがあります。治療前の体重は48キロでしたが今は51キロです。医師によると、体重が増えたということは、薬がよい作用を及ぼしていることだそうです。来週、血液検査を受けに行きます。よい結果が出ることを祈ります。

2017年9月28日

☒ 先週、血液検査を受けてきました。よい結果が出ました。カルシトニン（腫瘍マーカー）の数値が、治療前より下がっていました！薬の効果があったのです！薬を飲むのはとても辛かったのですが、こうして結果がわかり、本当に効いたのだと実感しています。副作用もあるため、今は薬の量を半分にし、1日おきに服用しています。新年までには治療コースが終わる予定です。細胞レベルの変化が現れるのはまだ先ということなので、断層撮影検査は1月頃の予定です。私を助けてくれたみなさん、私にチャンスをくださり本当にありがとうございます。

2017年10月19日



「私と病原環境論」

私がまず出会ったのは、「医学は社会科学である」というアメリカの科学史家シゲリストの言葉（「文明と病気」岩波新書）でした。次にデュボス「人間と適応」（みすず書房）に出会い、そしてマクニール「疾病と世界史」（新潮社）にショックを受けました。

そこには、600人の部下を率いたスペインのコルテスの軍が、3万人ものメキシコ軍を破り、征服したことが書かれていました。「コロンブスが来てから—先住民の歴史と未来」（朝日選書）などを読んだのはずっと後でした。アメリカ大陸の原住民は、私たちと祖先を同じくするモンゴロイドでした。メキシコ兵が倒れたのは天然痘のためでした。同じく、インディアンが倒れたのは、結核でした。アメリカ大陸には無かった病気、天然痘、結核、発疹チフスなどが、スペインやイギリス、フランスのアメリカ大陸征服を助けたのです。

その代わりにコロンブスは、梅毒をヨーロッパに持ち込み、20年後には日本にも到達しています。アマゾンの原住民も、中南米のインディオも、アメリカインディアンもエスキモーも、みんなモンゴロイドで、血液型はO型です。今は、侵略したヨーロッパ人と、奴隷のアフリカ黒人と原住民との混血が主になっていますが。

梅毒はヨーロッパで急性の病気として広がり、北米では結核が急性の全身病—つまり、粟粒結核と結核性髄膜炎—が流行し、生き延びた二世は瘰癧（るいれき—頸部リンパ節結核）になり、三代目でようやく肺結核になりました。梅毒は、日本に辿り着く間に慢性の病気になり、今はもっとおだやかな病気に変化しています。

当初、このことを理解することができませんでした。なぜならば、現代医学では、病気は変化することなくそのまま続くと考え、人に適応をしていくとは考えないからです。近代医学は、抗生物質、ワクチン、抗がん剤といった魔法の弾丸（オペラ「魔弾の射手」の魔弾）を持ったが、その後壁にぶつかったと言われました。（「近代医学の壁」岩波新書）。しかし、今なお現代医学者はそれに固執しています。さらには、遺伝子工学を用いて遺伝子操作までしようとしています。

日本では、自殺、発達障害、無差別殺人、5歳以下の事故死などの数を減らすことができいていません。先天性の病気を減らすことにも成功していません。私の提唱する医学は、少なくとも子ども場合は環境を変えることができますから、子どもは成長と共に環境が変わり、それによって病気から逃れることができます。しかし、大人になるとそれが難しくなります。

世界の各地で、その環境によってかかる病気が違います。文明化が進むと、だんだん同じ病気になっていきます。アメリカに移住した日本人は、世代が進むと病気もアメリカ化しています。現代日本は、病気も事件もアメリカ化が進んでいます。

日本は、人口に占める100歳以上の人の割合が世界で最も高いといえます。日本の伝統的な食事が日本人の寿命に影響を与えているのは、間違いないと言われています。その食生活が日本人の遺伝子を変化させて来たことがわかり、世界の遺伝学者から注目されています。今、遺伝子の世界でも、考古学の世界でも、環境との相互作用が注目されています。

黒部信一：すずしろ診療所所長 小児科医師
ブログ <http://kurobe-shin.no-blog.jp/>

2018年チェルノブイリ32周年救援カレンダー

「子どもたちの保養 チェルノブイリと福島」 撮影：広河隆一

毎年ご好評いただいているチェルノブイリ救援カレンダー2018年版が間もなく完成します（11月初旬完成予定）。

今年7月、チェルノブイリ子ども基金が長年支援しているベラルーシ「希望」を広河さんと福島の家が訪問。ベラルーシの家と交流しました。2018年カレンダーはその様子や、沖縄で保養をする福島の子の親子の写真で構成されています。

また各月の小窓には、2017年5月に「希望」で子ども基金が開催した『チェルノブイリ被害者家族の保養』の参加者とベラルーシの里子の写真（撮影は子ども基金スタッフ）が掲載されています。ご自宅に、職場に、またプレゼントなどにも最適です。ご注文をお待ちしています。



■定価 1,100円 送料別（6部まで200円、7部～9部は実費）

10部以上：1部1,000円 送料無料

■お申し込み先・方法：チェルノブイリ子ども基金（FAXまたはE-mail、電話（最終頁に記載））

■お支払方法：カレンダー到着後、同封の郵便振替用紙にてお振込ください。

■カラー、サイズ：縦42cm×30cm 見開きA3サイズ

■デザイン：川島進デザイン室

*カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島原発事故による被災児童のための救援金にあてられます。2017年版の収益は144万円でした。

***** 2018年チェルノブイリ32周年救援イベント「広河隆一講演会」決定 *****

2018年4月20日（金）19:00～ ココネリホール（東京都練馬区：練馬駅北口すぐ）

詳細は今後、HPやブログ、2018年2月号ニュースレターでお知らせします。

販売品のご案内 ～収益は子どもたちの薬代や保養費用として活用されます～

①「リネンクロス」ベラルーシ製

1枚 800円

サイズ：45～50cm×70cm

「赤・紫・青・緑」から色をご指定下さい。

柄はお任せください。



②「リネンクロス・リンゴ柄」ベラルーシ製

1枚 700円

サイズ：35cm×70cm

色はおまかせください。



③メッセージカード（ハンドメイド）」ベラルーシ製

1枚 300円

サイズ：10cm×15cm（模様部分は布です）

柄はお任せください。

<HPをご覧くださいだけの方は番号をご指定ください>



④「マトリョーシカのマグネット」

⑤「マトリョーシカのキーホルダー」

1個 500円

色・柄はおまかせください。



⑥ポストカード「いのちの輝き」撮影：広河隆一

1セット（6枚入り）500円

※10セット以上ご購入の場合1割引



画像は子ども基金のHPでご覧いただけます。

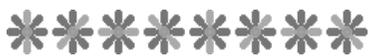
●ご注文方法：①住所 ②電話番号 ③氏名 ④希望品名と数量を明記の上、

FAX・TEL・メールでお申し込みください。

●送料別（実費）

●お支払い方法：振込用紙を同封しますので、品物が届きましたらお振込みください。

小額の場合は切手でのお支払いも可能です（封筒に金額分の切手を入れてお送りください）。



募金・救援状況



●募金状況	2017年6月～9月 (単位:円)			
	6月	7月	8月	9月
募金件数	149	151	48	25
救援寄付金	537,905	301,780	152,902	1,221,119
保養費	180,000	191,120	19,800	3,000
里子支援	53,080	1,896,920	461,220	56,490
ニュース購読費	32,000	34,000	16,000	4,000
イベント賛同金	2,000	-	-	2,000
物販	-	900	-	10,540
合計	804,985	2,424,720	649,922	1,297,149

*その他、切手、ハガキなどのご寄付をいただきました。

●救援状況 2017年6月～9月 (単位:円)

<ウクライナ>

◎子どもたちの生存

里子支援金 12人 (17年7-12月) 445,419
 現地銀行手数料 3,426

◎緊急支援 (ウクライナの女性の治療費支援) 628,155
 現地銀行手数料 3,426

<ベラルーシ>

◎「希望」

子どもたちの夏の保養 (17年8月3日～26日) 実施費用 1,544,677

◎困難の中の子どもたちへ希望を

里子支援 54人 (17年7-12月) 1,848,096

里子支援 1人 (17年7-12月) 33,825

里子追加支援 1人 11,275

夏の保養: 保険代、交通費 37,070

◎チェルノブイリのサイン 里子追加支援1人 52,062

♡ 募金団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

【6月】ひばりが丘グレイス協会／広河隆一写真展事務局／ケイ歯科クリニック／広河隆一写真展開催を支援する会

【7月】原発災害情報センター／三重チェルノブイリ被曝児童救援募金／イエス・キリスト協会祈りの家／チェルノブイリ子ども基金奥羽／西小岩幼稚園

【8月】(株)音楽センター／日野市役所内自治労日野市職員組合／

【9月】生活協同組合パルシステム東京「平和カンパ」

♡ 寄贈品 ♡

子どもたちへのお土産として、キーホルダー、カード、日本のカレンダー、工作セットなどご寄付いただきました。ありがとうございます。保養に参加した子ども、訪問先の里子やそのきょうだいへプレゼントされました。

三重チェルノブイリ被曝児童救援募金／藤田様／飯吉様／富永様／中嶋様

★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキュー店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリゴドモキキン

(3)三菱東京UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金



プレゼントを手にする女の子

事務局から

■報告会 子どもたちの保養 チェルノブイリと福島 2017年12月2日(土)14:00~16:00

- 「チェルノブイリの子どもたちの保養」
佐々木真理 (チェルノブイリ子ども基金 事務局長)
 - 「福島の子どもたちの保養」
下野佳津子(沖縄・球美の里 ボランティア)
 - 「たらちね診療所について」
黒部信一(未来の福島こども基金 代表、小児科医)
 - 「チェルノブイリ原発の現状」
小寺隆幸(チェルノブイリ子ども基金 理事)
- 【資料代】500円(定員100名)
【会場】パルシステム東京 新宿本部 2F第1・2会議室
【最寄駅】大江戸線「東新宿」駅B2出口より徒歩5分
【共催】チェルノブイリ子ども基金・未来の福島こども基金
【後援】生活協同組合パルシステム東京
【申し込み・問合せ先】チェルノブイリ子ども基金
【当日緊急連絡先】080-8714-5601(当日 12:30
~報告会終了時迄)



- ## ■ボランティア募集 ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加ください。
- 次回予定 2/17 (土)午後1時~4時頃まで。
ご都合のよい時間帯だけでも大歓迎です。
- 場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ10階)
- ※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時~午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

- ## ■2017年4月チェルノブイリ救援イベント・動画
- 4/28に開催した今中哲二さん講演会の様子、子ども基金事務局長佐々木、黒部医師の報告の動画、福島から避難されている母親の訴え(こちらは音声のみ)が子ども基金のHPにアップされています。今中さんが使用されたパワーポイントもご覧いただけます。
<http://ccfj.la.coocan.jp/2017-kouen.html>

- ## ■写真展「広河隆一 戦場の子どもたち」
- 広河隆一フォトジャーナリズム50年 入場無料
2018年3月8日(木)~3月17日(土)(3/12 休館)
11:00~20:00(初日 12:00開始、最終日 18:00終了)
【会場】東京芸術劇場(東京都豊島区) ギャラリー2
展示内容:子どもたちを中心とした約100点の写真。
全国主要都市で順次開催の予定。
(問)TEL & FAX: 059-229-3078(写真展事務局)

**** ご協力いただいているみなさまへ ****
振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております
事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべてのの方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ
通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ
郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書が入り用の際はお申し出ください。

- ★編集後記★ 今年は諸事情によりカレンダー完成が遅れてしまいました。早めにご注文下さった皆様、お待たせして申し訳ございませんでした。今号が今年最後のニュースです。ご支援をほんとうにありがとうございました。2018年もどうぞよろしくお祈りいたします。(事務局)

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●
〒177-0035 東京都練馬区南田中2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808
E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp
◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>
◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>
※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。